

研究経過報告書

2024年3月9日

研究員 (留学者)	所属：文学部 職：教授 氏名：松田俊哉
派遣期間	2023年4月18日～2024年2月28日
研究主題等	古典絵画における混合技法の制作研究 1. 混合技法の手法と表現の特性 2. 混合技法の実験制作
報告事項	(研究活動の概要、内容、成果等、添付書類の見出し等)
	1. 研究の概要
	本研究の目的は古典絵画における混合技法の習得である。本研究を遂行するため、混合技法の権威Magister Wolfgang Marx氏の技法書に基づく研究を行うウィーン国立高等美術院 (Akademie der Bilden Künste Wien, 通称/ウィーン造形美術大学) の絵画研究所を拠点に絵画制作を行った。
	技法研究はMarx氏と絵画研究所のMagister Christoph Rodler氏の連携指導で進められた。Wolfgang Marx工房での古典巨匠絵画の混合技法の講義と絵画研究所での実験的な制作という進め方であり、不定期的に三者による技法習得の検討を重ねた。因みに、美術院の夏季と冬季の長期閉鎖に伴い絵画研究所の使用に制限があり、その間は在宅での制作研究と、豊富な古典絵画収蔵の美術史美術館 (Kunsthistorischesmuseum) や美術院附属美術館ギャラリー (Gemäldegalerie) での混合技法絵画の鑑賞研究に充てることができた。
	2. 研究の内容
	本研究は、筆者が25年間継続的に行っている鉛筆の無彩色表現と、混合技法の下地の地透層という彩色の相違に端を発している。対象を無彩色の階調で捉える鉛筆の線描法、地透層の単色に白色 (卵テンペラ) の階調で対象を捉える絵筆の線描法である。言い換えて、前者は黒の線描による光の減算的描法の蓄積、後者は白の線描による光の加算的描法を基調とした有彩色の描法である。これは色彩の有無による彩色表現の視点の違いである。
	これら彩色法の観点から本研究を技法演習に位置付けた。混合技法は材質

	<p>から地透層（単色），卵テンペラ（白色），油彩（有彩色）という三工程で行う絵画制作である。本特性を明確に視覚化するために，描く対象の質感や色彩，陰影，空間を観察し描くという写実表現を選択した。もとより写実表現が古典絵画の手法であったことも選択の理由である。</p>
	<p>一方，Wolfgang Max氏は「混合技法で描いた画家が実在したかどうかは疑わしい」とした。14世紀ファン・アイク兄弟から17世紀オランダ絵画へ至る絵画手法のひとつを混合技法と提唱したMarx Doerner (1870-1939)について「デルナーの発言は古典絵画の形式の継承として解釈されるべきではなく，実際にどのように制作されたかに関わらず，初期ルネッサンス絵画に似た絵を描くことを可能にする手法として解釈されるべきであろう」（姫野慎二 訳）との見地に立ち，氏は混合技法を仮想上の古典画法とみなしたうえで技法書を記している。</p>
	<p>板材を支持体に制作した筆者の混合技法について，Wolfgang Marx氏作成の技法書（前出訳）に基づき制作の工程と内容を下記に記す。</p>
	<p>1. 支持体Hartfaserplatte（堅い圧縮材）の切断と紙やすりの研磨</p>
	<ul style="list-style-type: none"> ・長年乾燥させよく管理された天然の木片であれば歪みが少ない。
	<p>2. 結合剤の作成</p>
	<ul style="list-style-type: none"> ・水1Lに65gの兎の皮膠を12時間浸しその後膠が溶けるまで湯煎する。
	<p>3. 前膠塗り</p>
	<ul style="list-style-type: none"> ・30～35度の膠水を1の板材に1度薄く均一に両面に塗る。
	<p>4. 地塗り溶液の作成</p>
	<ul style="list-style-type: none"> ・水性と油性の併用（混合技法）を目的とした地塗り剤である。
	<ul style="list-style-type: none"> ・1容量の膠水（液状・Leimwasser），1容量の白亜（Champagnerkreide）
	<p>1容量のジンクホワイト（Zinkweiss）を塊にならないようふるいにか</p>
	<p>け，ハンドミキサーで攪拌する。その後最大1容量までの膠水で希積</p>
	<p>する。</p>
	<p>5. 板材の膠溶液の塗り</p>
	<ul style="list-style-type: none"> ・第1段階は150番のやすり研磨と粉塵の拭き取り，第2段階は再度膠水（
	<p>湯煎40～50度）を刷毛で丁寧に塗り，天候や気温に合わせて完全に乾</p>
	<p>くまで放置する（120～150分），という組み合わせで膠水を両面に塗</p>
	<p>っていく。</p>
	<p>6. 地塗り</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ・4で作成した地塗り溶液を塗り重ねていく。 ・地塗りは薄く均一な層を少なくとも5回両面に塗り重ねる。塗りが乾いた後、表面が滑らかになるように1層毎に軽く紙やすりで研磨する。両面への塗りは板材の歪曲を避ける目的がある。
	<p>7. 絶縁 (Isolierung)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1容量のダマール樹脂溶液と1容量のテレピン油の溶剤の塗り。 ・白亜地の吸収性の高さを念頭に6の前に画地の表面を絶縁する必要がある。
	<p>8. 原寸大の下素描と支持体への転写</p>
	<p>9. 地透層 (Imprimatur)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地塗りの後、つまりテンペラ描画の前に塗る透過または不透明な中間色をインプリマトゥラーという。白色テンペラの描画では影の役割を果たすため、仕上がり時の影の色（中間色）を意識し色を選択する。
	<p>10. 地透層用の卵テンペラ結合剤及び油媒剤</p> <ul style="list-style-type: none"> ・結合剤（卵エマルジョン）の作成は1容量の卵（卵黄+卵白、皮膜を剥ぐ）、0.5容量のダマール樹脂溶液、0.5容量の冷打亜麻仁油 (Leinö Kaitgeschlagen)、2容量の水を混ぜて作成する。 ・混ぜる順番は小瓶に入れた卵黄と卵白をよく振り混ぜ、次にダマール樹脂溶液を混ぜてよく振り、最後に水を混ぜてよく振る。この順番であれば成分の性質上よく混ざり合う。
	<p>11. テンペラによる地透層色の作成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・9の顔料と10のエマルジョンをペインティングナイフでよく混ぜ、更に卵エマルジョンと水を加える。この場合、1容量の卵エマルジョンと1容量より少し多めの水の調合である。 ・地透層は一層で終わる。幅広い平刷毛で画面に平坦に薄い層で塗る。 ・影の色を想定した地透層色の選択は描く絵のイメージによる。いずれの色であれ白色顔料（チタニウムホワイト）を混ぜたやや彩度の低い基調色の方が白色テンペラ描画の階調が調整しやすい。
	<p>13. テンペラ描画後の絶縁 (Isolierung)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・テンペラ絵具の乾燥後の絶縁には、地透層の油分吸収を防ぐという目的がある。1容量のダマール樹脂溶液と1容量のテレピン油の混合液はテンペラ絵具に染み込み固着する。幅のある平刷毛でできる限り薄く

	表面が乾くまで繰り返し塗る。
	14. 卵テンペラによる白色の下層描き
	・白色顔料を卵エマルジョンに混ぜてテンペラ絵具として使われる。描く時の希釈剤（画溶液）には水だけが使われる。白の階調の調整は水加減で行う。
	・下層描きでは対象のフォルムの陰影を白の階調で描く。対象や画面全体のヴォリュームを白の階調を調整した濃淡で表せるため、細部まで描き込める。卵テンペラを薄く塗ることで速乾性を得られ、下層描きが幾重にも重ねられるという技術的な有用がある。一方、重ねるラズールによって濁った階調ができやすく色の彩度を保つのが難しい。
	15. 樹脂油絵具による上層描き
	・テンペラの下層描きの乾燥後の樹脂油絵具による上層描きである。彩色は二つに分けられる。ひとつめは全画面に1層目の油絵具の層を薄く塗っていく方法で、全体の配色や強弱、明暗を調整しながら彩色を進めていく。ふたつめは上層描き以前の下層描きから複数の色を使い描き分けていく方法である。
	・樹脂油絵具に含まれる樹脂と卵テンペラに含まれる樹脂が互いに結合し合い、卵テンペラと乾いていない樹脂油絵具が固着する。樹脂油絵具によるラズール（透層）はガラスの膜が覆うような効果を生む。また半透明な層は下層描きのテンペラを生かす有効な色彩表現である。
	3. 研究の成果
	混合技法による絵画作品7点を制作した。描画材の速乾性は何層にも白色テンペラを重ね確かなフォルム表現をつくり、また樹脂油絵具では写実的な細部描写を可能にした。それ故に一作品の制作に時間をかけ過ぎた面は否めないが、その反面、混合技法の習得では十分の成果を得ることができた。
	また、写実表現はこの技法の特性を最も効果的に発揮させる手立てとして有用であったが、混合技法の美質である彩色の透過性や重層性は写実や具象表現に限らない。もとより古典絵画から「解釈」した画法が他の表現様式へどのように活かせるのか。抽象や装飾などの様式面からだけでなく、描画材の組成研究から探ることも考えたい。
	4. 教育への還元
	本研究は、芸術領域の絵画研究として技法に特化したものであり、一表現

者として絵画表現の新たな展開に繋がる契機となったのは確かである。他方それに関連して膨大な古典絵画の収蔵作品に時間をかけ接する機会に恵まれ、ウィーンの芸術的環境の恩恵に浴したのも事実である。ブリューゲルやボッシュ、デューラー、クラナッハといった北方やドイツのルネサンス期のマイスターピースの数々に改めて絵画の奥深さを感じたのである。

2025年開講予定の「芸術の世界」ではこの経験を反映した授業ができると思われる。そこで扱うのは古典絵画に限らないが、絵画においても古典を通して、近現代芸術の有り様を考えるヒントが多くある。

5. 謝辞

2023年4月18日から2024年2月28日までの間、研究活動に専念する機会を与えていただきましたこと、心から御礼を申し上げます。これからの芸術活動を見据えた貴重な時間でした。

6. 混合技法の絵画作品(一部)



Wolfgang Marx 氏と Christoph Rodler 氏



『西洋梨』



『三つのレモン』



『パン』

～『パン』が完成するまでの工程～

